

デジタル教科書を用いたより効果的な 国語教育の実践

～補習授業校における国語力格差に対応するために～

北東イングランド補習授業校

C/O Oxclose Community Academy
Dilston close, Oxclose Village, Washington, Tyne and Wear NE38 0LN

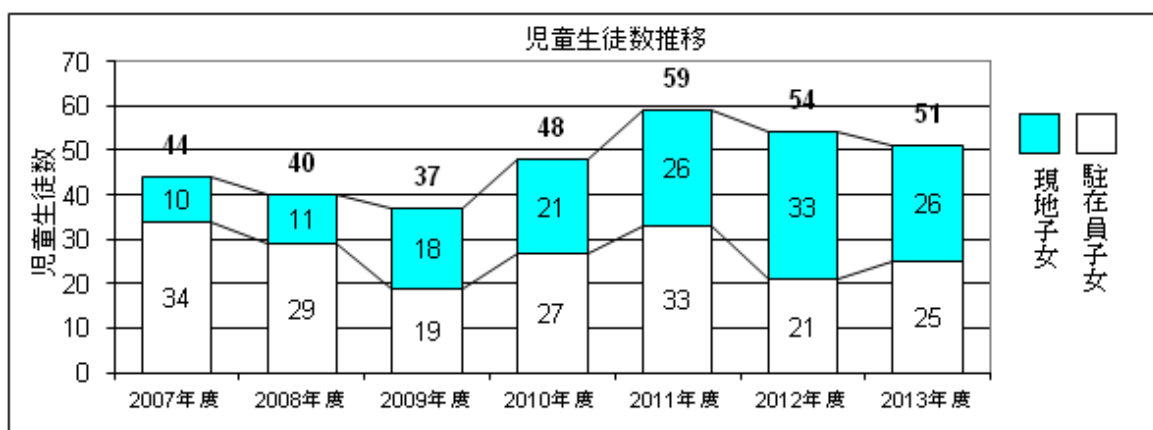
<http://www.neengland-hoshuko.co.uk/>

1. 研究の背景

本校は英国北東部に位置し、日本から派遣されている駐在員の子供達が将来日本へ帰国し、日本の学校教育を受ける場合に円滑に学校生活に適応できるように、補習授業を行うことを目的として設立された。

近年においては、年々現地子女の駐在員子女に対する割合が増える傾向にあり(グラフ 1)、それに伴って学年間・クラス間での国語力の格差が広がりつつある。国語力の格差があるクラスの中でいかに円滑に授業を進め、かつ児童・生徒各自の国語力を高めていくことができるかが本校における大きな課題の一つとなってきている。また本校は英国のコミュニティースクール(公立中学校)の校舎を借用しており、教室の中にはパソコンやプロジェクターなどITシステムの設備が充実している。その設備を利用して本校においては、2011年度よりデジタル教科書を授業に導入しようとしてきた。2013年度は、パナソニック教育財団の助成金を得ることができ、全学年にデジタル教科書を導入することが可能となった。

(グラフ 1) 本校の最近の動向



現地子女の全体占める割合が増えたクラスでは、国語よりも英語が強いという児童生徒が増えてきている。その中で極端なケースでは日本語による指示を十分に理解できないというようなことも起こってきている。学年が上がるにつれて教材の内容が難しくなる中で学習意欲を失って補習校を去っていく児童生徒の数も増えてきている。授業の中では、内容を理解しやすくするいろいろな手立てを取りながら子供達の学習意欲向上に努めている。

また、2013年度には駐在員子女の割合が短期的に増え、今まで現地子女ばかりのクラスに突然日本から児童生徒が転入するという事も起こっている。今までは低いなりにクラス全体のレベルはほぼ同じだったところに日本でしか学校に行ったことのない児童生徒が加わることによって、今までにないクラス内の国語力格差が起こるクラスも出てきている。

2. 研究の目的

本校においては国語力格差があるクラスの中で充実した授業を行う手立ての一つとしてデジタル教科書を用いることを検討してきた。今回全学年にデジタル教科書を装備することができたことを受けて、デジタル教科書を用いた学習意欲を上げる授業の工夫について検討を重ねてきた。

定期的に行われる内部研修会において講師や運営委員が積極的に意見を交換し、デジタル教科書をいかに授業の中で活用することができるか話し合いを行ってきた。また年2回行われる保護者による授業参観においては、保護者がデジタル教科書を使用した授業を参観し、その後でアンケートを実施した。その結果、保護者からもデジタル教科書の活用方法についての意見を汲み取ることができた。その中から以下のような内容を研究の目的とすることになった。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① デジタル教科書を用いた視覚効果（音声効果）を活用した授業の工夫② デジタル教科書を用いた児童生徒の表現力（特にプレゼンテーション能力）を高める工夫③ デジタル教科書を授業計画作成に生かす工夫 |
|---|

これらの目的にそって、各クラスで取り組みを行った。

3. 研究の実践内容

① デジタル教科書を用いた視覚効果（音声効果）を活用した授業の工夫

- 1) 日時 2013年10月19日1校時
- 2) 指導者 マッケンジー英子
- 3) クラス構成とその様子

小学部3年単式学級一児童数8名(4名は駐在員子女(男子2名、女子2名)、現地子女4名(女子4名、うち1名は日本で2年間在日経験あり))。

クラスの雰囲気はとても明るく純粋な児童ばかりで、とても前向きに授業と向き合う傾向にある。苦手な部分をお互いサポートし合う体制も整っている。本学級の児童たちはそれぞれの育った環境が異なり、国語力の多様な格差がある。その格差は日本とイギリス二国間での生活に影響されたものが多い。一般的には駐在子女が現地子女より国語が得意だが、例外のケースも本学級では多く見られる。例えば、在英歴が長い駐在員子女でイギリスでの生活をポジティブに受け入れてきた児童はアイデンティティともかなりイギリス化している様子を見せる。そういった児童にとって日本の習慣文化は、現地子女と同じくらい身近なことではなくなっている。また、イギリスでの生活に順応することを最優先させている家庭の児童は国語学習を怠りがちである。そして、日本で2年間の在日経験を持つ現地子女の国語力は非常に高い。

4) 教材名 「すがたをかえる大豆」

5) 本時の目標 「大豆が様々な食べ方をされている事に関心を持ち、文章構成を理解しながら読もうとすることができる」

6) 本時におけるデジタル教科書使用の目標

- 付録アニメーションを活用して、単元内容への興味や関心を引き出す。
- 「総ルビ表示」機能を使用して、児童の予習量の格差を軽減し授業を円滑にすすめる。
- 単元範読例を聞かせて単元への総合理解を促し、漢字の読み方も確認する。
- クラス全体を前方スクリーンへ注目させ、画像、音声を活用することで、各児童の集中力を高めながら授業を行う。

7) 授業内容

- 大豆について知っていることを発表し合う。(写真1・2)
- デジタル教科書の範読を通して聞き、読み方、言葉の意味の確認を行う。
- 段落を知る。
- ワークシート2で内容を確認させる。



(写真1)



(写真2)

② デジタル教科書を用いた児童生徒の表現力(特にプレゼンテーション能力)を高める工夫

- 1) 日時 2013年9月14日3校時目
- 2) 指導者 仲井晴美
- 3) クラス構成とその様子

中学部2年男子1名・女子3名、3年男子1名の複式クラスである。全員が駐在員家庭の子女であり、英国滞在年数には大きな違いがある（滞在年数5年以上が1名、2年が2名、半年以下が2名）。そのため英国滞在歴が短い生徒と長い生徒の間における格差が問題となっている。滞在歴が長くなるにつれて漢字の習得や作文などに遅れを感じるようになるが、逆に英国の学校では常に授業の中でプレゼンテーションを取り入れているので、英国滞在年数が長いほどICTを用いたプレゼンテーションに対しては抵抗が少ないようである。また、日本から来てまもない生徒は文章や漢字を書く力は強い反面、自分の意見を述べるのが苦手な傾向がある。そのような生徒たちもグループ活動を授業に多く取り入れることによって徐々に自分の意見を述べる力がついてきている。

複式授業においては同単元同教材を用いている。2年間で光村図書の中学生用国語教科書の2年と3年の分を網羅することを方針としている。漢字については、学年毎の副教材を用いて学年別に漢字の習得を目指させている。

4) 教材名 中2教科書「字のない葉書」

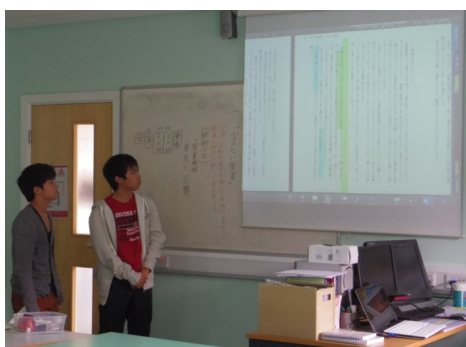
5) 本時の目標 「言動や様子を描いた表現に着目して、登場人物の人柄や心情を捉える」

6) 本時のデジタル教科書使用の目標「デジタル教科書を用いた児童生徒の表現力（特にプレゼンテーション能力）を高める工夫」

発表することを苦手を感じる生徒にとっては、発表の際にデジタル教科書を用い、自分の意見の根拠となる箇所をハイライトで示すことによって、自分の意見を明確に伝える強力なツールとすることができる。また、文章を読み取ることを苦手とする生徒にとっては、スクリーンに映し出された本文の中から自分の意見の根拠となる箇所を探し出させることによって、自分自身の読みをより明確なものとするのであろう。

7) 授業内容

- 「終戦の年」の家族の様子がわかる描写を抜き出す。
- 家族が置かれた状況とそれぞれの人柄や心情について話し合う。
- 話し合った結果を発表する。（写真1・2）



(写真1)



(写真2)

③ デジタル教科書を授業計画作成に生かす工夫

- 1) 日時 2013年9月7日2校時
- 2) 指導者 須田英津子
- 3) クラス構成とその様子

小学部6年単式学級一児童数2名（ともに女子。うち1名は駐在員子女で、もう1名は在英11年。父親がイギリス人である。）本学級は今学期（2013年度2学期）から児童が2名となった。1名は、かつて本補習校に小1まで在籍したのち日本へ帰国。今回、父親のイギリス再赴任で5年ぶりに本補習校へ復学した。日本から来たばかりで国語力には全く遜色がない。もう1名の児童は、家庭で日本語を話す環境が限られており、語彙不足が顕著である。しかし理解力があるため、漢字の読みや難解語の意味さえ分かれば教科書の内容を把握することが可能である。二人は小1当時、気の合うクラスメートであったと聞いている。今回再会を果たしてお互いが変わっていない事実にあぐらしたという二人。クラスの雰囲気は和やかで協力的である。

- 4) 教材名 「たのしみは」
- 5) 本時の目標 「短歌を読んでその特質を知り、短歌作りへの意欲をもつことができる」
- 6) 本時におけるデジタル教科書使用の目標

- 「国語力格差を踏まえて無理のない導入を行いつつ、教科書の到達目標水準を維持する。」
- 「児童の『気付き』や『熟考』を促し、積極的に授業に関与させる。」

7) 授業内容

<児童の学習活動>

- 三つの短歌の中から好きなものを一つ選び、理由も併せて発表する。（写真1）
- デジタル教科書 p78 に出てくる短歌の範読・斉読の後、前出 p80 の短歌との相違点を考えて発表する。
- p78 の短歌三首の意味を読み取る。（写真2）
- p78 の三つの短歌の中から好きなものを一つ選び、理由も併せて発表する。
- デジタル教科書 p79 下段の範読を聞いて、短歌作りのルールを確認する。→ノート



(写真1)



(写真2)

4. 研究の成果と今後の課題

上記の実践を含め、各学年でデジタル教科書を用いて実践活動を行った。その結果、デジタル教科書を授業に用いることによって、次のような効果があることが認められた。

- 1) 動画や写真などの視聴覚効果により、児童生徒の興味や関心を引き出すことができた。
- 2) 読解力に格差がある児童生徒も視覚的に認識することにより、理解を深めることができた。
- 3) 教科書の基本となっている日本文化を視覚的に理解することができた。
- 4) 語彙を視覚的に確認することができた。
- 5) プレゼンテーションに視覚教材を用いることにより、より具体的な内容を自信をもって発表することができた。
- 6) 本文や挿絵を個別に授業の流れに合わせて提示することにより、児童生徒の興味・関心をひくことができる指導案の作成が簡単にできた。
- 7) 児童生徒の発表内容をスクリーン上の本文に「書き込む」ことにより、共有することができた。
- 8) 国語力格差を踏まえた無理のない導入を行いつつも教科書の到達目標水準を維持することができた。
- 9) 児童の「気づき」や「思考」を促し、積極的に授業に関与させることができた。

また、今後の課題としては次のようなことが挙げられた。

- 1) 機器やデジタル教科書の取り扱いに時間がかかったり、不具合のために授業計画を計画通りに実行することができなかつたりする。
- 2) 椅子に座って操作することなどにより、児童生徒と直接対峙する場面が少なくなる。
- 3) デジタル教材には「手作り教材」のような温かさが無い。

5. おわりに

補習授業校に通学する児童生徒の環境は様々である。日本から着いたばかりの児童生徒もいれば、日常生活のほとんどを英語環境の中で暮らしている児童生徒もいる。国際化という観点から見れば、これは理想的な国際理解・国際交流の場であるとも言えるであろう。

今回の実践研究では、様々な背景をもった児童生徒がいる教室の中でスムーズに授業を進め、また学習目標を達成するための手立てのひとつとして、デジタル教科書を活用していく方法を検討しそれを実践した。デジタル教科書というのはあくまで授業を行うための手立てであり、これを用いることによって全ての教師が今までの授業内容を上回るようなよい授業ができるとは限らないであろう。しかし今回の実践授業の中では、視覚聴覚によるプレゼンテーションは、児童生徒の関心を引き理解を明確にする効果があるということを認めることができた。これをどのようにして、より効果的に授業の中で生かしていくことができるかが今後の課題であると考えられる。